翻訳

ある愛の物語

V・ヴァシリコス 作
山口 喜雄 訳

少女はいつもとまるで違う母の様子が朝から気になって仕方がなかった。昨日も母は入浴中に昔のロマンチックな恋歌を唄っていた。今日は、ギリシャ移民の成功者として羽振りのいい父が周辺の町で暮らしている親戚や友人を招待する恒例の木曜日で、誰もが夕暮れを心待ちにする日だった。それにしても、と少女は考えていた。あんなに浮き浮きとした母をこれまでに見たことがなかった。午後の授業が終わるのが待遠しかった。

学校から帰ってみると、テレビの前の椅子で前屈みになって刺繍をしているいつもの生気のない母の姿はなかった。ふだん化粧などしたことのないひとが今日は頬に薄紅を刷き、唇にはルージュをつけていた。初めてみる華やいだ母の姿だった。

物心がついてからの少女は父の暴力に怯える母の姿を見て育った。母の泣き顔を見たことはなかったが、笑声を耳にした記憶もなかった。家のなかは毎晩のように酔っ払って帰ってくる亭主関白の父の意のままに動き、暁け方まで友達とカードをしていたという父を母は寝ないで待っていた。母は父を愛していたが、同時に畏れてもいた。少女や妹が父に叩かれると母は娘たちを庇って止めにはいるのだが、かえって父の怒りを増し母まで打たれる始末だった。三人の女はただ一人の男の顔色を窺いながら暮らしてきた。父は家族になんの不自由もさせなかった。幼い娘たちには洋服を買ってくれたし、日曜日の散歩にも連れていってくれた。しかし彼女たちにとって怖ろしい存在であることに変わりなかった。

小学校に通いはじめた少女は、家族と社会のギャップにおどろいた。家父長制の権化のような父が支配している家から出てみると、外はまったくの別世界だった。女が命令すると男たちは唯々諾々とそれに従っていた。彼女たちは男の背に跨がる女性騎手だった。現実の社会はアメリカでも、家の中はいまもギリシャの旧弊なマニ地方だった。

午後六時になると招待客がつぎつぎに到着し始めた。最初の客は同じ市内に住む二人の叔母たちで、つぎはシラキューズ暮らしの親戚だった。そのあとは少女の知らない一組で、ここから百マイルほど離れた小さな町のプチェプシーからのお客さまということだった。この最後のグループのなかに端正なロマンスグレーの男性がいた。彼の指には結婚指輪はなかった。優しい表情をしていたが、周りの人たちに相づちを打つばかりで自分から話しかけることはなかった。何かに心を奪われている様子で、最後まで雰囲気に馴染まぬ部外者に見えた。

成功者の風格が身についた父が上機嫌で喋りながら部屋に入ってくるのを合図に、全員がテーブルについた。接待役の母はスープを注ぎながらテーブルを回っていたが、あの無口な男性のお皿のうえでその手が震えているのを少女は見逃さなかった。人々は新任の司祭の評判や身内の結婚話など同胞の噂話に熱中していてそれに気付いた者はなかった。叔母は帰国したときの土産話に、村の数本のオリーブの木が自分のものだと判り、始末に迷ったが姪っ子にプレゼントすることにしてきた、と嬉しそうに話していた。

会食者の弾んだ会話にうなずきながら、父はタオルを首に巻きテレビのボクシングの試合を見ていた。見知らぬ男性は、他の客たちのように賑やかにスープの音をたてることなく静かに食事をしていた。相変わらず自分からすすんで喋る様子はなかったが、他人の会話に耳を傾けながら話に加わっているように見えた。客たちはいつもの木曜日のように飲み、そして喰べた。パーティは盛りあがり、母は接待役で忙しかった。少女は手伝おうと席を立った。カード・ゲーム用の緑のテーブルクロスを敷くまえに空になった食器を台所に運びながら、母に聞いてみた。

「母さん、あの無口な男の人は誰れ？」

「プチェプシーからいらしてるノティアディス家のお知り合いの方でしょ」

「あの人は知っている人なの？」

「いいえ」

母は無関心を装って娘に答え、質問を打ち切るように台所から出ていった。

少女は直かに話してみたくなって男の傍まで近づくと彼は少女を膝のうえに乗せ、髪を優しく撫でながら学校のことを訊ねてくれた。素晴らしい声だった。身のこなしも穏やかで優雅だった。彼のことは名前と武器工場で

働いていること以外は聞きだせなかった。

父はボクシングの試合が終わるとギリシャ民謡のレコードをかけ、間もなく自分の店に出掛けてしまった。親戚や友人たちも、遠方まで帰る人がいるからと十時ごろには散会した。その夜、少女は母のことばかりを考えていた。母は終始楽しそうだった。てきぱきとパーティの後片付けをしている母を見るのも初めてだった。

翌日、少女が体育の先生が病気のため一時間早く学校から家に帰ってみると、昨夜の男性が母と並んで外のベランダに腰を掛けていた。彼は、ちょうど帰るところだったと言いながら少女の頬にやさしくキッスをし、高々と抱き上げた。それから母にコーヒーの礼を述べ、自家用車に乗って林のなかに消えて行った。彼が去ったあと、残った煙草の吸殻をこっそり袋のなかにしまいこんでいる母の姿が少女の脳裏に焼き付いた。が、その日以来少女が彼の姿を見かけることはなかった。さらに数年の歳月が流れた。親戚や友人を招く木曜日のパーティは続いていたが、彼は二度と少女の前に現われなかった。

後年になって、成人した少女がノティアディス家の人たちと話しているとき、うっかり口を滑らしてしまった従姉妹の一人から、あの口数少なかった男性の噂を聞いた。彼は、仲人の薦めで父と結婚する前に母が愛した人だった。彼もまた少年のころから母を熱愛していたという。旧いギリシャの慣習を頑固に踏襲しつづけた移民社会では自由恋愛はご法度だった。彼は初恋を胸に生涯独身を通したとも聞いた。

（完）

【作者について】

ヴァシリス・ヴァシリコス（Βασίλης Βασιλικός）は、コスタス・ガヴラスの映画『Z』の原作者としてその名は日本でも専門家筋に有名であるが、他の作品は殆ど知られていない。「ある愛の物語」（Μια ιστορία αγάπης）は短編集『最後のさよなら』（Το τελευταίο αυτί, 1979）中の一編だが、この小品をはじめ多くの作品がテレビ・ドラマ化されているので、ギリシャでは最も人気の高い作家の一人である。翻訳に使ったテクストはアテネのネア・シノラ社（Εκδ. Νέα Σύνορα）の一九九四年版で、本書に紹介されている作家の簡単な伝記ノートには次のように記されている。

《作者は一九三四年タソス島生まれのカヴァラ市民。一九九三年は処女作「イアソーン物語」の発表からちょうど四〇年目にあたる。これまでに出版された本は八〇冊余り。一九五〇年代にテサロニキの大学で法学を、アメリカでテレビ制作論を修めた。一九六七年から外国（イタリア、フランス、ニューヨーク）で過ごすが、一九八一年から八四年まで三年間はEPT・1（ギリシャラジオテレビ局チャンネル1）の副総裁を務めた。妻のヴァソ・パパドニウはソプラノ歌手。》

なお、一九九三年よりアテネに住む。